

終戦とともに姿を消した学びや

札幌市立中学校

昭和十五年ころの札幌には、いくつかの旧制中学校がすでに開校していました。しかし、人口が増えたと、道内各地からの進学希望者も多かつたことから、大変な進学難の状態になっていました。そこで、当時あった市立女学校（現在の東高）に加え、男子の市立中学校を望む声も大きくなったのです。財政難の折、開校までの道のりは険しく、校舎整備費を市民や企業からの寄付に頼り、十六年四月に何とか開校にこぎ着けることができました。

このような中で誕生した札幌市立中学校は、現在の啓明中学校の場所（南九西二二）にありました。制服は軍服を模したもので、戦時下の雰囲気の色濃く反映されています。

教員数はわずか五人でしたが、「一中（現在の南高）や二中（現在の西高）に負けるな」という合言葉の下、熱心に生徒を指導したそうです。

この学校の特徴として、生徒を厳しく育てるため独自の教育活動が挙げられます。学校に隣接して

修練道場が建てられ、精神修養のための正座や、道場での宿泊学習、毎朝の乾布摩擦などが行われたといわれています。時には銭函まで炎天下の中を二十四キも歩いて行き、水泳の訓練をするということもありました。

こうして、教師と生徒が一丸となって、独特の校風をはぐくんできました。しかし、終戦から一年余りたった二十一年九月、一つの事件が学校に暗い影を落としました。

戦時中、学校には軍事教練用の小銃などが備えられており、それらは、占領軍に破棄するよう命じられていました。その一部を校庭に埋めて処分したことが、兵器の隠匿であることがめられたのです。当時の校長はその責任を追及され、教職員の嘆願もむなしく、教壇から追放されてしまいました。このことは、生徒にとって、生涯忘れられない出来事になりました。

その後、学校もまた苦境に立たされます。新学制が実施され、市立中学校は市立第二高等学校と改称していましたが、占領軍から新制中学校への転換を勧告され、二十四年三月、最終的に廃校することに



ありし日の校舎（札幌市教育委員会文化資料室所蔵）

なつたのです。

市立中学校はわずか八年間で終えんを迎えました。しかし、短い歴史であればこそ、数少ない同窓生は強いきずなで結ばれています。

（平成十六年一月号 第九十三回）